

---

# 優しい少年

ライト級

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優しい少年

### 【Nコード】

N0434H

### 【作者名】

ライト級

### 【あらすじ】

戦国の世の中尾高の姫舞姫と、悪者扱いされてる宗田の2人は出会ってしまった。これは悲しい少年の物語。

## 第1話 出会い

戦国の世の中、一国の姫が問題になっている少年に出会う。しかしその少年はとても優しく、そしてとても不幸だった。

「まだ着かぬか？ 我は疲れたぞ。」

林の中を人に乗せた5頭の馬が颯爽と駆けついていた。その真ん中の白い馬から、少女が隣にいる家臣に気の抜けた声で尋ねた。

「もう間もなくだと思います。しばしの我慢を。」

「さつきも聞いたぞその答え。」

家臣が返答したが、少女は直ぐさま文句を言ったが、家臣は苦笑いしながら、

「そのように申すのは、やめてください。元々は姫が馬であるような所に行かれましたら、もうすでに到着している筈なんですから。」

「む？ それを言うな。」

家臣の言葉に少女は痛い所を突かれ、言い返す言葉が無くなってしまい、口を尖らせながら少しいじけてしまった。

この少女は、小さな国尾高の姫様、名を舞姫様と言う。髪は肩口に揃えられ、小顔で綺麗な目をしており、小柄ながらも、活発そうな雰囲気かでている。実際城ではお転婆姫なのだが、とても美しく元気がある事から

「太陽の姫」と呼ばれていて、絶えず縁談話が入ってくるのだ。今日も縁談で隣国まで呼ばれてやって来たのだが。

「我は強さと優しさを持った男が、好きじゃ！ お前の様なただの筋肉馬鹿はお断りじゃ！」

と大口を言って、縁談を断わってしまった。隣国の若殿は涙を流し

ながら悲しんだそう。本当に可哀相に。そんな事があり、憂さ晴らしとしてかなり遠くまで馬を走らせた結果、城に帰るのが遅くなつてしまった。

「今日の若殿はどうして、お断りしたのですか？ かなりの手柄を挙げている武将であつた筈ですが？」

家臣は疑問になりながら、舞姫に理由を伺つた。

「強いだけじゃ、我は納得しない。あやつの目は濁つていたし、尚且つ顔が恐すぎる。あーゆーのは嫌だな。」

舞姫は嫌な顔をしながら、淡々と答えた。もうすでにあの若殿に、何の興味も無いようだ。

「ハハ、確かにお顔はちよつと威圧感があつて、怖いものがありました。」

笑いながら感想を言うと、家臣はハツとある事を思い出した。

「そつといえ、恐いと言えば、舞姫様知っていますか？ 城下街で、問題を起こしている男がいるそうです。」

家臣は少し真面目な顔になりながら、舞姫に問題になっている男の話、聞いてみた。

「それぐらいの事ならちゃんと、知ってるわ。確か・・・宗田と言つたな。」

舞姫も少し真面目になり、家臣に答えた。

宗田、今尾高の城下街で悪事の限りを、働いている男の名前だ。

性格は極悪非道で、家に火を放つたり、子供を川に突き落したり、若い娘を襲つたりと数々の罪を犯しているらしい。

らしいとは、舞姫は実際には見たことは無く、全部家臣から聞いたものである。

「はいその者です。本当にこの男は危ない男なので、舞姫様、あまり城下街の方には下りないで下さい。」

家臣は心配そつな声で、舞姫に忠告の意味を込めて頼んだ。

「安心しろ我は強いから、大丈夫じゃ！」

そんな家臣の心配も露知らず、胸を叩きながら大きな声で言つての

けた。

その言葉に、ため息を吐きながら家臣は、

「ハ、何かが有ってからでは、遅

くわああ！」

突然後ろから悲鳴が聞こえてきて、舞姫達はバツと後ろを振り向いた。二人の野武士が槍を後ろにいた家臣に、突き刺していた。槍を引き抜くと力無く馬から落ち、二人の野武士が、舞姫達に向かって走って来た。

「貴様らああ！！」

横にいたもう一人の家臣が怒りの表情で、刀を抜きながら馬を二人に向かって走らせたが、

「ぐはあ！」

横から出てきた野武士に、槍で脇を刺され、

「！！」

走って来た二人に頭を槍で突かれて、そして、いつの間にか前にいた家臣も新しく出てきた野武士に、殺されてしまった。

さらにもう一人出てきて、舞姫達は合計五人の野武士に囲まれてしまい、動けないでいた。

「へへ、こりやくかなりの上玉だな。」

「確かにいい女だな、楽しめそうだなげへへ。」

野武士達はかなり下品な言葉遣いで、舞姫をいやらしい目で見た。

「貴様ら！舞姫様には指一本触れさせんぞ！」

さつきまで舞姫と話していた家臣が馬から降り、刀を抜きながら野武士達に言い放った。

「へへ、そうかいじゃ守ってみるよ！いくぞ！お前ら！」

おお！と叫びながら、4人が家臣に、もう一人が舞姫に向かって走った。

「舞姫様！」

既に、刀を交じまわせている家臣が舞姫に向かって叫んだが。

「大丈夫じゃ、我は強い。」

舞姫は、刀を抜きながら、静かに答えた。

「おらあ」

キン！刀と刀がぶつかり合ったが、一気に押し返し、野武士は尻餅をついた。

「ほらな」

刀を野武士に向けながら、家臣や野武士達に言い聞かせるように言った。

「クソ！このアマが！」

「あつ舞姫様！危ないです！」

「大丈夫じゃると言っとるだろ。」

野武士の1人が、舞姫に向かって槍を突き付けようとしたが、これを、刀で受け止め弾き返した。

「舞姫様・・・ぐわあ！」

しかし、家臣が目を外した隙に、刀の峰で首を叩かれ気絶してしまった。

「けっ手こずらせやがって。」

家臣の顔に唾を吐き、残りの野武士達が舞姫に向かってゆっくり歩み始めた。

「さあこれでお前1人だ。」

「1対5じゃ、意気がれんじやる。」

余裕の笑みを浮かべながら、5人で舞姫の周りを囲んだ。

「まだ、わからんぞ。」

正直舞姫は、少し焦っていた。こつも簡単に家臣達がやられてしまつとは、思わなかったのだ。野武士に向けながら、家臣や野武士達に言い聞かせるように言った。

「クソ！このアマが！」

「あつ舞姫様！危ないです！」

「大丈夫じゃると言っとるだろ。」

野武士の1人が、舞姫に向かって槍を突き付けようとしたが、これを、刀で受け止め弾き返した。

「舞姫様・・・ぐわあ！」

しかし、家臣が目を外した隙に、刀の峰で首を叩かれ気絶してしま  
った。

「けっ手こずらせやがって。」

家臣の顔に唾を吐き、残りの野武士達が舞姫に向かってゆっくり歩  
み始めた。

「さあこれでお前1人だ。」

「1対5じゃ、意気がれんじやろ。」

余裕の笑みをうかべながら、5人で舞姫の周りを囲んだ。

「まだ、わからんぞ。」

表情さえ変えなかったが、正直舞姫は、少し焦っていた。こつも簡  
単に家臣達がやられてしまうとは思わなかったのだ。

ここで焦ってはいけないと、思っているのだが無理だった。

「いくぞ！」

刀を上段に構え目の前の野武士に向かって行ったが、構えが大き  
すぎたため隙ができてしまい、

「オラア！」

キン！

横から出てきた野武士に刀をはじきとばされ、尻餅をつくように後  
ろに倒れてしまった。

「これで終わりだな。」

今度は逆に刀を突き付けられてしまい、舞姫は悔しそうに顔を歪め  
た。

「くそ。」

舞姫は顔を下に向けて呟いた。これから我はどうなってしまうんだ  
ろうと、思ってしまった。もう諦めていた時、

「ぐわああ！」

「ぐはあ！」

「ぎああ！」

野武士達の後ろの方から悲鳴が、鳴り響いた。

どき、一気に三人の野武士達が倒れ動かなくなった。

「ぐげえ！」

さらにもう1人の野武士も悲鳴を上げ、地面に力無く倒れた。

その横には、ボロボロの服を身につけている細そうな少年が、木刀片手に佇んでいた。

「だっ誰だ！てめえは」

刀を少年に向き直しながら、1人だけになってしまった野武士が、ビビりながら少年に聞いたが、

「・・・」

少年は何も答え無い。横から見ていた舞姫は少年の目を見て疑問に思ってしまった。

(なんて悲しそうな目をしてるんだ。)

舞姫は1人そお感じていた。

「なっ何なんだよ！てめえは」

痺れを切らした野武士が、刀を振り回しながら突っ込んで行ったが、目にも止まらぬ速さで、少年は野武士の頭を木刀で叩いた。そのま  
ま何も言わず地面に突っ伏した。「・・・」

無言のまま野武士の横に立っていた。舞姫に背を向けて立ち去ろうとしたが、

「まつ待て、礼ぐらいは言わせる。」

舞姫は慌てながら、去ろうとしている少年を引き止めた。その声で少年は立ち止まりゆっくりと舞姫の方を向いた。やはり舞姫が、思ったように悲しそうな目をしていた。少し間があったが、舞姫は恥ずかしそうに、

「あっありがとう。感謝する。」

と言った。その言葉に少年は驚いたが、すぐに表情を戻し、少年は恐る恐る口を開いた。

「僕に・・・あんまり関わらない方がいいよ。」

小さな声ではそぼそと答えて、再び立ち去ろうとしたが、

「待て。名ぐらい名乗れ。」



また咄嗟に呼び止めた。少年は振り向き舞姫の目を見た。そして観念したのかまた小さな声で言った。その答えに舞姫は驚いてしまった。

「・・・宗田」

これが舞姫と宗田の出会いであった。この出会いが2人の運命を変えていく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0434h/>

---

優しい少年

2010年12月4日05時01分発行